

有峰の特長

有峰は、薬師岳の麓、和田川、小口川、真川の上流部にあたり、周囲を山で囲まれた傾斜の緩やかな標高1100mの高原盆地。平安時代末期の源平合戦の後、戦いに敗れた平家の落人が隠れ住んだとも伝えられ、江戸時代には飛騨への裏街道として数百人が生計を営んでいましたが、富山県が県営発電所を計画して一帯を買収した大正期には十数戸を残すだけでした。

有峰ダムは、盆地の入口を流れる和田川を堰き止める高さ140mの重力コンクリートダムで、総貯水量は2億2300m³。富山県最大の貯水量を誇ります。盆地の傾斜が緩やかなためダムへの土砂の流入が比較的少ないのが特徴です。一方、ダム下流部と小口川、真川は急峻な渓谷となっており、有峰ダムの西側を流れる小口川上流の標高1400m地点にある祐延貯水地は祐延ダム・小口川第三発電所の取水池になっています。

常願寺川は、標高2662mの北ノ俣岳を源流に、立山連峰の山間部で真川、称名川、和田川、小口川などが合流した後、富山平野を流れて日本海に注ぐ河川です。流路延長はわずか56kmと信濃川の1/6程度の長さでありながら、高い標高から一気に流れ下ることから、国内屈指の急流河川として知られています。1891年（明治24）に常願寺川の治水工事のため明治政府から派遣されたオランダ人技師のヨハネス・デ・レーケは「これは川ではない、滝だ」と言ったと伝えられています*。

* 農林水産省HP「土地改良偉人伝～水土里を拓いた人びと～」 内務省技術顧問 ヨハネス・デ・レーケ



ダム建設前の有峰盆地



有峰ダムと薬師岳



北陸電力
アーカイブギャラリー

Hokuriku Electric Power Company 地域への思い
ARCHIVE GALLERY